紀伊・房総

くろしお物語 ◇36◇

東浦賀 干鰯問屋の一大拠点

絵と文・熱田親憙　題字・熱田秦華

関西漁民による鰯（いわし）漁業と魚肥・干鰯（ほしか）の加工生産は、需要の増加とともに伊豆国（静岡県東部）や相模国三浦沿岸から房総半島に波及し、更に常陸国（茨城県東部）、陸奥国（青森県、岩手県の一部）にかけて次第に広がっていった。江戸時代当初の関西漁民は漁具や納屋集落における生活用具一式を積んで春季に関東沿岸に来航し、秋季に生産した魚肥をも積み込んで帰国した。しかし、魚肥の生産が増えるにつけ輸送・販売を分離して関東と関西を結ぶ物流拠点の必要に迫られた。

そこで、江戸内湾の漁村に近く、外房沿岸からの輸送にも便利な浦賀水道を望む「浦賀湊」に物流拠点の白羽の矢が立った。白地図を見ても納得がいく。

浦賀は戦国時代には小田原北条氏の水軍が常駐し、江戸時代当初は徳川幕府の水軍や舟番所の拠点になっていたが、江戸と上方を結び付ける物流拠点として期待されるようになった。紀州系商人を中心に東浦賀干鰯問屋仲間が結成され、浦賀湊が魚肥の物流と商売の流通の一大拠点となった。これは湊口から奥まで2180㍍、横幅218㍍、深さ9～18㍍で三方を山に囲まれ、奥深い天然の良港であった事による。

100年続いた繁盛

東浦賀干鰯問屋は関西漁民の関東出漁と共に魚肥の集荷と上方積み込み作業が活発になり、繁盛した。郷土史家の話によれば、1698（元禄10）年ごろ、問屋15軒で干鰯の扱い高300万俵で笑いの止まらぬ繁盛ぶりだったという。幕府から湊口の燈明（とうみょう）堂の経費負担を要請されたり、財力のある人はお寺の建立を要請されたりと期待の大きい事業に発展した。

時がたつにつれて問屋による網主支配が強くなり、東浦賀干鰯問屋は仕入れ先の房総各地の網主に漁具代などの仕込み金を融通したりした。一方、房総の地元網主が力をつけ、ライバルとして関西漁民と主導権争いとなっていった。これに追い打ちをかけたのが1703（元禄16）年の大地震と大津波である。関西からの出漁民の人命、設備、漁具、家財道具に致命的打撃を与え、後退を余儀なくされた。

一方、江戸干鰯問屋は元禄・享保年間に幕府の公認を得て43軒をもって組織された。東浦賀干鰯問屋は1642（寛永19）年に幕府の公認を受けていたため、約100年近く続いたようである。しかし浦賀湊の干鰯の問屋通りは現在川西通りというが、残念ながらその当時の面影は見られない。現在酒屋さんを営むご主人が「子どものころ問屋時代の蔵でよく遊んだものですよ。ここ東浦賀に奉行所でも呼んでおけば、現代に至るまで問屋の繁栄は続いたでしょうにね」と残念そうに語っておられたのが印象に残った。